

## 4-06 重度認知症者における ADL の変動性に関連する要因の調査 ～睡眠や休息活動リズムは ADL パフォーマンスと関連するか？～

○石丸 大貴(OT)<sup>1)2)</sup>, 田中 寛之(OT)<sup>1)</sup>, 永田 優馬(OT)<sup>1)2)</sup>, 西川 隆(MD)<sup>1)3)</sup>

1)大阪府立大学大学院 総合リハビリテーション学研究科

2)大阪大学大学院 医学系研究科 精神医学教室

3)奈良学園大学 保健医療学部 リハビリテーション学科

Key word : 認知症, ADL, 日常生活

【はじめに】重度認知症者の Basic Activities of Daily Living (BADL) は変動することが報告されており、臨床場面ではその変動性が結果的に介助量増大の一因となっている。そのため、重度認知症者の支援では、対象者が一貫して BADL を行えるような環境や介助が必要とされている。認知症者は、BADL の変動性に寄与すると予測される日中の眠気や休息活動リズム障害などの問題をしばしば抱えているが、実際に BADL の変動性との関連性は十分に調査されていない。

【目的】本研究の目的は、重度認知症者の BADL の変動性に関連する要因を明らかにすることである。

【方法】本研究は一施設の横断的観察研究である。対象者は2015年11月-2017年2月の間に介護療養病棟に入院していた患者のうち、1) DSM-5の診断基準に従い認知症と診断された者、かつ2) Clinical Dementia Rating (CDR) により重度(CDR3) および中等度(CDR2)と判定された者であった。ただし、1) 認知症以外の精神神経疾患(意識障害、せん妄を含む)や整形外科疾患など覚醒水準と ADL に影響する疾患あるいは身体合併症を有する者、2) 主治医により調査が病状に影響を与えると判断された者、3) 評価1週間以内に抗精神病薬、抗うつ薬、睡眠薬を新たに服用開始した者は除外された。

BADL の変動性は、パフォーマンスベースの評価と日常ケア場面の観察評価の計2つを実施した。パフォーマンスベースの評価では、起居・移乗・整容・洗顔を一連の動作として、同じ評価者・環境設定で、週に2日間、1日2回の計4回の評価を行なった。日常ケア場面の観察評価では、昼食時の食事動作を、週に2日間、1日2回の計2回の評価を行なった。なお、Tappenら(1994)が開発した Refined ADL Scale を参考に、演者らが改変したスケールを用いて詳細に BADL の変化を捉えた。各評点の差に基づいて、一連の BADL の日内と日隔変動、そして食事の日隔変

動を算出し変動性を求めた。

また認知機能(Mini Mental State Examination)、Behavioral and Psychological Symptoms of Dementia (BPSD) (Neuro Psychiatric Inventory -Nursing Home)、そして、休息活動リズムを評価した。なお、休息活動リズムはアクチグラフにより定量的に測定した。休息活動リズムは相対的振幅、活動相・休息相の長さ、活動ピーク・休息ピークのタイミング、分断性、規則性を算出した。

統計分析では、Spearman 順位相関係数を用いて、BADL の変動性と他の評価項目(認知機能、BPSD、休息活動リズム)の相関を分析した。

【倫理的配慮】大阪府立大学大学院総合リハビリテーション学研究科研究倫理委員会より承認を得た(2015-207)。発表に際し、対象者あるいは代諾者より同意を得た。

【結果】対象者は28名(女性22名、男性6名)であり、平均年齢は90.1 ± 5.8歳であった。認知症重症度は重度21名、中等度7名であった。

一連の BADL の日内変動と有意な相関が認められたのは、認知機能( $\rho = -.541, p = .003$ )と BPSD( $\rho = .497, p = .007$ )であった。同様に、一連の BADL の日隔変動と有意な相関が認められたのも、認知機能( $\rho = -.547, p = .001$ )と BPSD( $\rho = .442, p = .018$ )であった。一方で、食事の日隔変動にはいずれの変数も有意な相関は認められなかった。しかし、休息活動リズム変数の相対的振幅( $\rho = -.342, p = .075$ )および分断性( $\rho = .368, p = .054$ )との間には差のある傾向が認められた。

【考察】BADL パフォーマンスの変動が大きい対象者は認知機能がより不良で、BPSD がより重症であった。また日常ケア場面の ADL 変動には休息活動リズムの異常が関与している可能性が示唆された。ADL を支援する上では、介助量だけでなく、変動性および関連する要因を評価し介入していくことが重要であるだろう。